OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈ともだち〉讃歌 : 「わからない」、編み物、マジック
Author(s)	ほんま, なほ
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 228-234
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100176
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【ミニ特集　ともだちについて】

〈ともだち〉讃歌
「わからない」、編み物、マジック

ほんまなほ

1

わたしの学生時代のちいさなおもいでから、はじめたいとおもいます。

大学１年だったか、２年生だったか、もはや記憶があいまいなのですが、まだそのときは、大学にも「教養部」というものがあり、土曜日も午前に授業がありました。その土曜のあさ、阪急石橋駅から坂道をずっとのぼり、いくつも池をこえてキャンパスにたどり着いてからも、さらに小高い丘のうえに建つ、かつて「イ号館」とよばれていた、塔のような建物に入ります。そこで開講されていた「セミナーＳ」という科目名だったとおもいますが、いまは亡きひととなられた溝口宏平先生の文献購読の授業が先生の研究室でありました。いまのようなシラバスもない時代、溝口先生は、ハイデガーの研究者だと耳にしていたので、わたしはてっきりハイデガーを読むのかとおもい、期待して受講したのですが、授業がはじまってみると、ジョン・ロールズの『正義論』を読むといわれるのです。しかも、なんと受講者はわたしと、もうひとりの学生しかいません。１回目に説明をうけ、テクストのコピーをわたされて、２回目になってさあ読もうとなったときに、わたしがロールズではなくて、ハイデガーを読んでほしい、とおねがいすると、とくにふたりで事前に示しあわせていたわけでもないのに、なんともうひとりも、そうしてほしい、といいだす始末。「困ったな…」と先生はにがわらいされ、しかたがないな、という雰囲気をただよわせながら、「じゃあ、なにを読みたいの？」と質問されます。わたしは、まってました、といわんばかりに、カバンから書店で買ったばかりの洋書をとりだして、「これです」とさしだしました。そんなわけで、*Was ist Metaphysik?* を読むことになったのです。

ところが、いっしょに授業を受けていた学生は数回でこなくなってしまい、まさかの、先生と一対一の授業になりました。毎回、わたしが日本語訳をしなければいけないのですが、なにしろはじめて読む哲学書で、ドイツ語も、内容も、わたしにはとてもむずかしくて、予習がなかなかはかどりません。先生は、ふたりきりになって気がゆるまれたのでしょうか、わたしのおぼつかない日本語訳を尻目に、どうして、この大学の教養部で教えるようになったのか、不遇であったごじぶんの身の上はなしをされはじめました。そのときは、わたしはあまりにおさなくて、お話しされた内容をじゅうぶんには理解できていませんでしたが、それでも研究者になる道がいかにきびしく、また、理不尽なものでもあるかを、おぼろげながらも知ることになりました。

あるときは、わたしが質問したひとつの単語について、またあるときは、とつぜん、おもいつかれた話題について、即興で自由にお話しされるその時間は、わたしにとってかけがえのないものとなりました。わたしの予習が十分できていなくて、テクスト

を１０行も読めていないときも、先生はそのことをとくに咎めだてられもせず、のこりの時間はふたりであれこれたのしくかたりあいました。

この時間をとおして、わたしはたくさんの知識をえました。公刊されたばかりの新資料や講義録など、のちになってわたしが卒業論文を書くのに参考になった貴重な情報もたくさん教えていただきました。しかしながら、わたしにとって、はるかにたいせつなのは、その授業でどのような知識がえられたか、なにを学んだかよりも、教師と学生ではなく、ひとりの人間として、テクストをまえに対等に話しあうこと――わたしは聴く側に立つことがおおかったとおもいますが――、ここではなんでも話してよい、という経験ができたことでした。先生は、教師や専門家というより、ひとりの対話者でした。先生は、わたしがなにかを質問しても、ためらうことなく「わからない」といわれ、わたしはたいへんおどろきました。わたしは、対話をとおして、なにかを知るよりも、わからないことをわちあいつつ、なおもそれについて語りあう、ということを学んだのです。このような知への態度は、「講座制」の学部教育ではなく、教養部時代に溝口先生のほかにもわたしが受けたいくつかの授業において涵養されたといえるでしょう。わたし自身も教員となり、さまざまな地域での対話の実践を知るようになった以後も、それは対話の原体験として、いろあせることなく、いまのわたしのなかで生きているのです。

このような、いち教員といち受講生のあいだにきずかれた関係を、ふつうは、〈ともだち〉とよばないでしょう。わたしも当時は、大学のえらい先生だと尊敬していましたし、もちろん、同級生とおなじようにはおもっていませんでした。しかし、わたしのかんがえる〈ともだち〉とは、同胞や同輩とおなじではありません。それは、立場や身分、知識や経験のちがいがあってもなりたつ関係、あえていうなれば、溝口先生のように、すでに亡くなられたかたとも、むすばれる関係である、とかんがえるのです。いまおもえば、わたしたちは、たがいに異邦人でした。わたしは、当時、フランスで話題になっていた「政治的なもの」と哲学者の政治へのコミットメントに関心をもっていました。先生は、そのことについて熱心に語るわたしを肯定も否定もせず、ただじっと話を聴いておられました。また、わたしは、流行にとらわれず、目のまえのテクストについて、いまおもうことを語る、という先生の姿勢を新鮮にうけとめました。たとえるならば、それは、先生とよこにならんで、たがいに「わからない」と口にするその先にあるものにおもいをはせ、それについて、ことばをかわす関係でした。そして、先生が亡くなられたいまもなお、その対話はつづいています。

2

「家がみつかるまで、しばらくわたしたちのところにいればいい。」

いまから２０年ほどまえ、わたしは、フランス語をまんぞくに話せず、住むアパルトマンもみつからないまま、パリで途方にくれていました。そんなわたしに、しばらくのあいだ郊外にあるじぶんたち家に滞在するようすすめてくれたのは、ダニエル・ラミレズ（スペイン語発音では「ラミレス」だが、本人はフランス語発音で、こう名乗った）とベルタ・ヴェガでした。わたしがダニエルとはじめてあったのは、わたし

がパリに滞在する１年前に、調査でおとずれたバスティーユ広場に面するカフェ・デ・ファールの席上であり、彼は「アニマトェール animateur」とよばれる哲学カフェの主宰者のひとりでした。ダニエルとベルタのふたりはチリのサンティアゴ出身で、わかいころにパリに移住し、ダニエルはフルートの教師をするかたわら、パリ大学で博士論文を執筆中であり、さらに２週ごとの日曜に、故マルク・ソーテの意志をひきついで、なかまとともにカフェ・デ・ファールでの哲学カフェを主宰していました。そして、ベルタは心理療法家としてグループカウンセリングのしごとをしながら、大学で非常勤講師をつとめていました。

日本文化にふかく傾倒し、日本をなんどもおとずれ、さらに音楽家であり哲学者でもあるダニエルと、わたしは、すぐに意気投合しました。また、グループカウンセリングにも関心のあったわたしは、ベルタともなかよくなりました。スペイン語なまりのフランス語、日本語なまりのフランス語、フランス語はどちらにとっても異国語です。なんとかパリにアパルトマンをみつけたあとも、週末にはふたりの家をたずねて交流をつづけました。

カフェ･デ･ファール、映画館の Entrepôt、コミュニティセンターの Forum104 など、ダニエルが定期的に哲学カフェをおこなっている場所はどこでも、わたしはついていきました。はじめのうちは、早口で出身地なまりのフランス語がほとんどききとれませんでした。すでに哲学カフェについての本で書きましたが、マルク・ソーテゆずりの手さばきで哲学カフェを仕切るダニエルは、カフェにつどう客たちと互角、あるいは、それ以上にたくさん話して、議論をたたかわせます。「カフェ・フィロとは、哲学討論会なのだ」と、はじめて会ったときから、ダニエルはわたしに語っていました。ソーテも、ダニエルも、スタイルは一騎打ちです。彼は発言する客を順に論駁していきます。ところが、日本でも哲学カフェをはじめた、わたしとなかまたちは、対話を重視し、わたしたちが「進行役」をするときは、できるだけ質問役に徹して、論駁はしません。哲学カフェは討論なのか、対話なのか、ダニエルとわたしとで、意見はわかれました。

もちろん、文化習慣のちがいもおおきいのです。パリのひとたちは、時間などおかまいなしに、とにかくしゃべりまくります。カフェ・デ・ファールでの哲学カフェがおわったあとも、寒い２月だというのに、１時間も外にたったまま、テーマについて話しあっています。それだけのおしゃべり好き相手では、ダニエルのようなやりかたがうまくいくのかもしれません。わたし自身、対話のスタイルはすこしずつ、かわってきていますが、そのころはとにかく、聴くことに専念していました。ダニエルやベルタの話も、わたしはじっとだまって聴いているし、会話以外のところでも、たとえば、バスを乗り降りするところで、ほかの客が全員バスに乗るまで待ってから、わたしが乗る。それをみて、ダニエルは「信じられない」とあきれていました。そのようなわたしの態度を見るうちに、異文化、とりわけその身体の作法を尊重するダニエルは、なにかをかんじたようです。話す文化と聴く文化、論争と対話のちがい、並行線でありながら、たがいの実践を尊重する、そのような関係がすこしずつ育まれてきました。実践とは、ことばやうごきを身につけるのとおなじです。なんであれ、じぶんが納得いくところまで、とにかくやってみるほかありません。

わすれられないのは、はじめてダニエルとベルタの家をたずねて、そこでアニータとすごした日々です。「きみがパリに来るころは、わたしたちはバカンスで留守にしてるけど、留守番をしているアニータがきみを迎えてくれるよ。」わたしが日本をたつまえ、そう書かれたダニエルからのメールをうけとり、そこに書かれていた住所をたよりに、なんとか家にたどりつき、玄関のベルをならしました。そこでわたしを出迎えてくれたのがアニータでした。でも、アニータはフランス語がほとんど話せません。あとできくところによると、彼女は、チリからダニエルたちをたずね、数ヶ月ふたりの家に滞在していたそうです。数日して、バカンスから娘たちとともにダニエルたちがもどってきましたが、その後もダニエルもベルタも、しごとでいつも夜おそくまで家にかえれないため、ふたりのかわりに、アニータとともに、まだちいさい娘のエリザとルーのあいてをしていました。年長のエリザによくスペイン語とフランス語の通訳をしてもらったものです。娘たちが寝静まったあと、居間でアニータのすきなスペイン語のうたを聴きながら、アニータもわたしも、それぞれ夜おそくまで編み物をしていました。編み物だけがふたりの共通のことばでした。ふたりとも、だまったまま、ことばをかわすことなく、毎晩、編み物をしていました。

わたしがパリのアパルトマンに移ってからも、そうした日々はつづきました。それからしばらくして、アニータがチリに帰ることになりました。みんなで空港にアニータを見送りにいったあと、家にもどってみんなで食事をしているときに、ベルタが、しずかにわたしにこういいました。「あなたは、とてもいいことをしたのよ。じつは、アニータはキッチンドリンカーで、アルコール依存になっていて、その回復のためにわたしたちの家にいたの。あなたがここにいるあいだ、彼女と毎晩、編み物をしていたおかげで、そのあいだは、アニータはお酒を飲まなかったの。」わたしは、なにもきづいていませんでした。おそらく、わたしの目のまえで、アニータはじぶんとたたかっていたのでしょう。そのことをあえて、わたしにしらせずにいた、ベルタたちのやさしさをかんじました。そして、これもまた、べつのところで書いたことですが、わたしのほうも、だれにもいえないおもいを胸にかくしながら、それを一心に編み物にたくしていた時期でもあったのです。アニータ、ベルタ、そしてわたし、それぞれがおもいを胸にかかえながらも、それをことばにすることなく、ただ、時間をともにしたのです。

このようなダニエル、ベルタ、アニータ、そのほかの南米出身の〈ともだち〉との時間は、わたしのパリでの経験を一変させました。一年ほどのわずかな期間ではありましたが、わたしは、その〈ともだち〉の目線でパリでの生活をみることになりました。バカンスでいっしょに南仏に旅行にいったときも、フランス人たちからの、南米からの移民やアジア人へのひややかな視線がささりました。わたしが、中南米のひとたちのおかれる状況に関心をもち、じっさいに足をはこぶことにもなったのは、ずっとあとになってからですが、わたしがであった、ひとりひとりの〈ともだち〉の顔をおもいうかべながら、その目の底にこの社会と歴史がどのようにうつってきたかを、かんがえるのです。

わたしの記憶のなかでは、あの家で、ダニエルとベルタはいつもスペイン語でいい

あらそっていて、ダニエルとエリザはフランス語でケンカし、エリザはベルタのフランス語のいいまちがいをわらって訂正していました。ダニエルたちとすごした時間は、もちろん会話をたのしむこともありましたが、それ以上に、ほとんどことばを交わさず、ただいっしょにすごすだけのことのほうがおおかったとおもいます。ダニエル、ベルタ、アニータたちとの対話は、ことばによるものではなかったのです。

3

そのとき、おもわず、わたしの目から大粒のなみだがこぼれおちました。ハワイの小学校でこどもたちと対話するドクターJこと、トーマス・ジャクソンに会い、さいごに彼が空港に見送りにきてくれたときのことです。『こどものてつがく』でも書いたように、早朝に「P4C」と手で書かれた紙をもっておとずれたわたしたちを迎え、レイを首にかけてくれたことにもおどろきましたが、ハワイ大学の授業に参加させてもらったときの経験が、いまもわすれられません。わたしは英語をちゃんと話さないといけない、とはじめは固くなっていました。しかし彼が紙袋からとりだした毛糸をまきながら、彼の問いにこたえて学生ひとりひとりがたのしそうに話しているさまをみて、しらぬまに、わたしのこわばりはほどけ、わたしに順番がまわってきたときには、じぶんからことばがわいてくるのをかんじました。そして、いよいよ、ワイキキ小学校で授業にくわわることができたときも、それまでみてきたほかの場所とは、まったくちがった様子でした。学校のこどもたちが彼の訪問におおよろこびしていたのに、胸がうたれました。それどころか、わたしがすっかり、その授業をたのしんでしまったのです。わたしは、空港でわかれるときに、なみだをこすりながら、ドクターJに、「ようやく、わたしは〈ともだち〉をみつけた。これまで、ずっと、哲学と対話をさがす旅をつづけてきたけれど、やっと、なかまをみつけることができた…」と、こえにならないこえで、つたえました。

そのとき体験した熱がさめぬうちに、わたしと、ともに対話するなかまたちは、なんどもドクターJに会いにいきました。わたしたちの関心は、ほかの訪問客のように、ハワイの「こどものための哲学」ではありません。3回目にハワイをおとずれたわたしたちが、食事をしながらドクターJに、なぜ、あなたはそんなに愉快なひとなのか？とたずねたとき、彼は即座に、それは、じぶんがそうしていると、きみたちがとってもいい顔をするからだよ、こたえたのです。それから、わたしたちは、いそがしい彼の予定のあいまをぬって、車のなか、散歩の途中、食事中と、数時間におよぶ対話をしました。そこで語られたのは、ハワイ大学に提出したサルトルについての博士論文、大学で企画した映画祭のこと、比較哲学で学んだクリシュナムルティのことなど、小学校で「こどものための哲学」をはじめるまえに、彼がたどってきた道についてでした。彼のいう「知的なセーフティ intellectual safety」の「知的」ということがなにを意味するのかをめぐっても、長時間にわたって話しあいました。いそがしいのに、わざわざ時間をつくってくれてありがとう、とつたえると、「いや、きみたちは特別だ。こうやって話をする機会をつくって、聴いてくれるひとはなかなかいないよ」と彼はいうのです。

いまも、ドクターJの弟子たちの活躍する学校に、日本からたくさんの見学者がお

とずれるようです。円になってすわるとか、毛糸のボールをつかうとか、問いをだしあって、ひとつ選んで話しあうとか、おおくのひとたちは、対話というものを手順だとおもっているようです。もし、そのような手順が「哲学対話」とよばれるのだとすれば、わたしが対話として追求しているのは、それではありません。かつて、わたしは、対話とは、〈そのひと〉があらわれでてくる瞬間にいあわせることだ、と書きました。ドクターJが、わたしたちとのある対話のなかで、「ボクはお兄ちゃんが大キライだ！　だって、お兄ちゃんはおもちゃをひとりじめするし…」と、あるこどものまねをしながら、そうやって話すこどもたちがだいすきだ、と語っていました。彼はたんなるこども好きではないのです。わたしたちは、ドクターJのいる場で、だれかが〈そのひと〉自身であることを拒んでいる内外からの力がゆるみ、ほどかれていくのを目の当たりにしました。思考もことばも、〈ひと〉をしばってうごけなくさせることがあります。わたしたちは、なにが話されたか、これからなにを話すのか、ということばかりに注意をうばわれがちです。しかし、まぎれもない〈そのひと〉自身が話しだす瞬間を、全身でその場にともに招きよせることこそが対話なのです。たいせつなのは、「ボクはお兄ちゃんが大キライだ！」ということばでも、感情表出でも、傾聴でもありません。そのことばとともに、その場でおこなわれ、わたしたちのまえに〈あらわれている〉ものごとを、愛でることなのです。

わたしは、ここで書いたひとたちや、ほかに哲学や対話――それらは、いわゆる「哲学対話」でもないし、「哲学」や「対話」と名づけられていない場合もすくなくありませんが――を実践している〈ともだち〉と話しあった内容のおおくを文字にはしていません。なぜなら、対話を経験するとは、対話を記録するのとはまったくべつのことであり、音楽やダンスが楽譜や振付譜によってではなく、直接にからだからからだへと伝えられるのとおなじである、とかんがえるからです。なにかをおこなう知恵は、それが記録されるやいなや、あっというまに対象化され、知識や情報になってしまいます。もちろん、それはわるいことではありません。そのような情報におおくのひとがアクセスできるようになることは、一面ではよいことでしょう。わたしも、ビデオなどを記録媒体として活用することがありますが、それはあくまでも、じぶんのうちに眠っている記憶をよびさますために使用しています。こうやって〈書く〉という技術もそうです。書くこと、話すことが手段となり、書かれること、話されることが対象や情報になってしまわないように、わたしは、いま目のまえにはいない〈ともだち〉にむけて書き、話すようにつとめています。

知恵とは、なにかを〈ともにおこなう〉ことであり、対話とは、知恵が知識になってしまう、そのてまえで〈ともだち〉とともに、それを支えあうことだ、といえるのではないでしょうか。ドクターJがドナルドダックのこえをモノマネして、こどもたちがおおよろこびするからといって、ほかのひとがおなじことをしても、知恵ははたらきません。彼のいう「マジック」は、〈ともだち〉になるわたしたちのうちに芽吹き、うごきだすものであり、それをうごかせるようになるまで、ともになされる修練がかかせません。そして、それにおわりもありません。対話とはそれをおこなっているひとの数だけ、ちがったかたちがあり、それぞれの歴史をともなっているのだとおもい

ます。だからこそ、〈ともだち〉に出会い、訪ね、その〈ともだち〉の生きている背景を感じ、必要であれば数十年、数百年とさかのぼって知り、たがいに異なる状況を生きていても、その〈ともだち〉の生と死におもいをはせながら、対話をかさねていく。知恵はそこで生まれ、生まれなおしていく。それは、〈ともだち〉がその場にいるときのみならず、いなくなっても永遠に〈ともにする〉ことができることなのだ、とわたしはおもうのです。

（ほんま・なほ）